

# 安達峰一郎 没90年しのぶ

## アジア人初 常設国際司法裁判所長



外交官、常設国際司法裁判所長として活躍した安達峰一郎記念財団提供

山辺町出身の外交官・国際法学者の安達峰一郎(1869~1934年)の没後90年の節目だった今年、その仕事を回顧する動きが相次いだ。今日6日には、記念財団が東京都内で追悼の集いを開催。外務次官経験者や研究者らが集い、没後100年を見据え、安達の再評価を願った。(仲條賢太)

安達は長く在外公館に勤務し、国際連盟の日本代表や、アジア人初の「常設国際司法裁判所」(PCIJ)、オランダ・ハーグ)所長を務めるなど活躍。法による世界平和の実現を目指した。追悼の集いは、安達峰一郎記念財団(東京)が主催した。東京・一ツ橋の如水会館で行われ、約50人が出席。国際法学者の柳原正治・放送大特任教授が「戦争

のない『黄金の時代』を追求した安達峰一郎の軌跡」と題して講演した。会場には、歴代の外務次官や駐日オランダ大使ら、豪華な面々がそろった。皇后雅子さまの父で、PCIJの後継機関・国際司法裁判所(ICJ)で2009~12年に所長を務めた小和田恒さんは、裁判長として決断を迫られた際には安達のことを思ったというエピソード

## 外交と法で平和目指す 山辺出身

安達峰一郎 山辺町生まれ、東京帝大卒。外交官となり、1905年の日露講和会議(ポーツマス会議)で小村寿太郎全権の随員として活躍。国際連盟やPCIJの発足に大きく関与し、連盟の日本代表を務めた。30年にPCIJ判事、翌年所長。34年に病死し、オランダで国葬が行われた。満州事変後に国際的孤立を高める母国を案じながらの逝去だったという。

ソードを披露。「安達氏は自分にとってメンターだった。世界の人々に知ってもらう必要がある」と述べた。元外務次官の敷中三十二さんも「外交努力で平和を訴えた第一級の国際人でも、もっと知られて良い。再び戦争の足音が聞こえる今日ほど、彼の教えが大事なことはないのではないか」と訴えた。

財団は今後、没後100年を見据え、安達の名を冠した奨学金や記念賞、弁論大会などにより知名度の向上を図るといふ。地元の山辺町では今年6月、朗読劇が催された。安達とともに欧州に渡り、ベルギー大使館の料理人を務めた女性が主人公。町関係者で作る「劇団やまのべ」による公演で、好評につき11月にも再演された。同劇団は安達の生誕150年だった19年にもその生涯を描いた作品の公演を行った。コロナ禍をきっかけに演劇を控え、朗読劇に移行したが、今後は演劇と朗読劇を並行して行うことも考えるという。脚本を執筆した広野浩二代表は「安達はスケールの大きな人物。様々なアプローチで人間的な魅力や功績を町内外の人に伝えていきたい」と話す。



学識者や元外交官らが集まり、安達の功績をしのいだ「追悼の集い」(6日、東京都)